

<研究ノート>

## 神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝

—翻訳と註解 (10)—

小松 進\*

### The Autobiography Written by Holy Roman Emperor Charles IV

—Translation into Japanese and Commentaries (10)—

Susumu KOMATSU\*

#### 1. はじめに

カール4世の自叙伝は唐突に終わる。理由は分からない。現在我々が手にする自叙伝は、1346年にカールがドイツ国王（原語ではローマ人たちの国王）に選出される出来事をもって完結する。つまり、自叙伝は誕生からドイツ国王選出に至る30年間の半生を綴るカールの青春譜という体裁をとっている。しかし、カール自身の手になるのは1340年暮れに行われた北イタリアのアクィレーア遠征までで、それ以降の叙述はカール以外の誰か名の知れない祐筆による補筆である。したがって、自叙の書という本来の意味の自叙伝は、今回訳出する第14章が最終章となる。この第14章の梗概は、以下の通りである。

- ・チェコ王国とその服属地域シロンスクの情勢
- ・父王のチェコ国王ヨーハンと皇帝ルートヴィヒ4世の和睦交渉

- ・フランスとイングランドとの間の戦争(いわゆる英仏百年戦争) 勃発とそれへの参陣
- ・ニーダーバイエルン大公領の相続問題
- ・父王ヨーハンの失明とアヴィニョン訪問
- ・イタリアのテレンツォ村での幻視体験を記念する諸制度の設立
- ・ティロール伯領での謀略事件
- ・ロンバルディーア地方とアクィレーアへの軍事遠征

第14章で活写されるのは、チェコ王国で国王に次ぐ地位のモラヴィア辺境伯として父王ヨーハンを補佐するカールの姿である。カールはもはや、ヨーロッパ政局という盤上で父王が意のままに操る駒ではない。反目することを恐れずに、カールは独自の意思と政策を貫き、父王と対等の立場を築きつつあった。

カールの活動の拠点となったのは、チェコ王国とティロール伯領である。相続娘との結婚により弱年でティロール伯領を継承した弟

\* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

ヨーハン・ハンリヒの後見として、1336年以来、カールは父王によってこの伯領の代理統治を託された。カールはその地で弟伯の後見役として辣腕をふるう一方、隣接するイタリア北部の政争に巻き込まれる。

アルプス山中のこのティロールはドイツとイタリアを結ぶ戦略上の要衝で、帝国の諸勢力の野望が複雑に交錯する係争の地でもあった。14世紀は、帝国内にルクセンブルク家、ハプスブルク家、ヴィッテルスバッハ家の三大家門が鼎立した時代で、これら三大家門は自家の勢力拡大をめぐる激しい衝突を繰り返した。その衝突の焦点となったのが、ティロール伯領である。まず、ルクセンブルク家のチェコ国王ヨーハンがこの伯領を自家の傘下に収めることに成功したが、他の家門はそれを横目に伯領奪取の機会を虎視眈々と窺った。この情勢下で最初に牙を剥いたのが、ウィッテルスバッハ家である。第14章に描かれる同家の皇帝ルートヴィヒ4世の画策したカールの弟ヨーハン・ハインリヒの追い落とし劇が、それである。この陰謀がルクセンブルク家とヴィッテルスバッハ家との間に生じるティロール係争問題の発端となった。それはやがて、ルートヴィヒ4世に対し、ルクセンブルク家がモラヴィア辺境伯カールを対立国王に擁立する政争劇へと発展していくであろう。

本稿ではカール自身の手になる自叙伝最後の部分を訳出し、その叙述の背景を明らかにするため、カールの宿敵となるヴィッテルスバッハ家とその皇帝ルートヴィヒ4世について補足説明しておきたい。

## 2. 自叙伝第14章（翻訳）※

その年の夏<sup>1)</sup>、余はヴィソケー・ミート方面に繰り出し、ホツェニュー城と、ポトステインの領主<sup>2)</sup>が支配するその他あまたの城砦を制圧した。当時、余がポトステインの領主

と敵対していたためだが、やがて和睦が成った。

同じくその頃、ブジェズニツェで銀鉱が発見された。

同じくその夏、ルクセンブルク伯領のわが父の許に赴こうと、余はチェコの家臣たちを多数率いて行軍した。父が呼び寄せたからであるが、フランクフルトで余は引き返した<sup>3)</sup>。

チェコに帰還した折、プラハ城の王室禮拜堂に、余は諸聖人に捧げられた参事会を設立した<sup>4)</sup>。

それから、ハンガリー国王<sup>5)</sup>を余は訪ねた。国王が重い病に臥せていたからである。そして、余がハンガリーに逗留してチェコに帰国する前に、わが父が和睦交渉のため、皇帝のごとく振る舞っていたルートヴィヒの許へ赴いた<sup>6)</sup>。ところで、ルートヴィヒは、余を抜きにしてわが父とはいかなる和睦交渉にも応じないと約束し、余と協議してから、父との合意を図ると口にしてた。しかるに、このルートヴィヒは自らの約束と前言を蔑ろにし、わが父をまんまと騙して、すでに余とは和解したと請け合い、父から合意を取り付けてしまったのである。こうして、ルートヴィヒは余とわが父との間に大きな不和の種を撒き、余と締結したものでっ上げた和睦に基づいて、さながら皇帝がなすかのように、わが父に領地を安堵したのである。わが父も和睦に応じ、余がいまだルートヴィヒに同意していないことを知っていたなら、父も応じるはずがない多くの点で、ルートヴィヒの要求を飲んでしまった<sup>7)</sup>。しかし、この一件を聞き及ぶや、余はマインツ司教区のミルテンベルクにいたわが父の許に急ぎ、バイエルンのルートヴィヒと父との間で取り交されたことは、すべて虚偽であり、詐欺であると説明した。そして、両者の間で合意を見た取り決め、余はチェコ貴族とともに署名せず、この和睦を有効と認めようとは

しなかった。そして、この度企てられたことはすべて欺瞞と見なし、その無効を宣言したのである。

それから、余はハンガリーとオーストリアの境にあるブラティスラヴァに赴き<sup>8)</sup>、ハンガリー国王<sup>9)</sup>とオーストリア公<sup>10)</sup>を和解させた。

その後、オバヴァとラチブシュの侯ニコラス<sup>11)</sup>を討とうとして、わが父がモラヴィアに兵を進めたが、余がどうか父とニコラスを和解させた。ただし、ニコラスは城砦の幾つかと多額の金銭をわが父に引き渡すことになった。

続いて、余はポトステイン城の攻囲に向かった。そこが余とチェコ国王に対して反乱を起こし、たびたび略奪を繰り返していたからである。城は難攻不落であったが、9週間後に、余はそれを攻略した。そして、城の主である領主もろとも塔を倒壊させ、城壁と城のすべてを土台まで破壊し去ったのである<sup>12)</sup>。

次いで、余はわが父とともにヴロツワフに赴いた。その地の司教<sup>13)</sup>がわが父に恭順の意を示しておらず、これに激怒した父は司教からミリチの城砦を奪い取った。しかし、司教はそれを理由にわが父を破門に処し、一方、父も司教を聖職者もろとも市から追放した。わが父とヴロツワフ市の聖職者と間に、この争いはまる2年の間続くことになった。

その後、わが父はバウツェンに向かい、それからフランス国王<sup>14)</sup>に助勢するためフランスへと兵を進めた<sup>15)</sup>。その頃、フランス国王とイングランド国王<sup>16)</sup>との間に戦争<sup>17)</sup>が勃発していたからであり、父は余を国王名代としてチェコ王国に遣わした。しかし、余もまたペテル・ズ・ロジウムベルク<sup>18)</sup>をわが名代に据え、バイエルン経由で父の跡を追った。そのバイエルンで、余はわが義兄のバイエルン大公ハインリヒ<sup>19)</sup>が永眠していたことを知った。ハインリヒはわが姉のマル

ガレータ<sup>20)</sup>との間に一人息子<sup>21)</sup>を嗣子として遺すことになったが、その嗣子は10才の少年に過ぎなかった。その遺児と大公領の後見権を併せて掌握したのが皇帝のごとく振る舞っていたルートヴィヒであった。それは、ルートヴィヒと遺児の父との間で取り交された結婚契約にもとづく。すなわち、かねてより、ルートヴィヒの甥であるバイエルン大公でプファルツ伯ルードルフ<sup>22)</sup>の娘<sup>23)</sup>が、ハインリヒの嗣子に約束され保証されていたのだが、ルートヴィヒはルードルフの娘を斥けて、自分の娘<sup>24)</sup>をハインリヒの嗣子に押し付けてしまったのである。ルートヴィヒの娘はいまだ喋ることができず、ルートヴィヒは請け合った。「娘自身が口をきくようになるまで、余が娘の代わりに結婚の約束をしておこう」。ところが、神が娘をそのままにしておかれたので、ルートヴィヒの娘は一生口をきけぬままになってしまった。さて、それから、余はバイエルンを通り抜け、ルクセンブルク伯領のわが父の許に辿り着いた。

その地で、余もまた自らの意志でフランス国王の救援へと出陣した。当時、フランス国王が兵を集結させぬうちに、イングランド国王がフランス領のカンブレ市<sup>25)</sup>の攻囲を企てたからだ。イングランド国王はそこからサン・カンタンの町の前に兵を進め、さらにリブモンの町に転じ、ラオン市近傍まで進出した。そこでやっとエノー伯領へ兵を返したが、フランス国王はエノー伯領の境界までイングランド国王を追撃した。両軍の陣営がエノー伯領との境界に築かれた。しかし、フランス国王が戦列を整え敵軍を一日中待ち受けていたのに、イングランド国王は戦場をフランス国王に明け渡し、陣を払って撤退してしまった<sup>26)</sup>。イングランド軍にはドイツの諸侯があまた助勢していたにも拘らずにである。すなわち、低地ドイツからはブラバント公、ユーリヒ辺境伯とベルク辺境伯、フランドル伯が名を連ね、高地ドイツからはマイセ

ン辺境伯、バイエルンのルートヴィヒの息たるブランデンブルク辺境伯など、ルートヴィヒの勢力下にあった諸侯が数多く参加していたのである。このルートヴィヒは、イングランド国王自身さえもドイツにおける皇帝名代に任じていたのであった。

その頃、父は片方の眼の視力を失った上にもう一方の眼の視力も低下したので、その回復を願い、ひそかにモンペリエに医者を訪ねた。しかし、その逗留中に、父は完全に失明してしまった。一方、余自身はヒスパニアの国王<sup>27)</sup>を援けてグラナダの国王フェラガキウス<sup>28)</sup>を討つべく出征しようとし、すでにわが軍勢と武器をモントバンへ先発させていた。ところが、わが父は余をひそかにモンペリエに留め、そこから先へ行くのを許さなかった。

わが父の眼が治療不可能となると、余は父と共にアヴィニョンにいる教皇ベネディクトゥス12世<sup>29)</sup>を訪ねた。ヴロツワフ司教区における教皇献金の支払い問題について教皇と和解することが、訪問の目的だった<sup>30)</sup>。だが、その折は和解ならず、係争は未解決のまま残された。しかし、ローマ教会とヴロツワフ司教区との間にあった教皇献金をめぐるとの不和は、その後解消されることになる。

アヴィニョンに逗留していた折に、イタリア滞在中の余の身に起こった前述のヴィエンヌ人のドーファンをめぐる幻視<sup>31)</sup>について、余は教皇に語った。ただし、理由が幾つかあって、わが父にはこのことを漏らしたり打ち明けたりせず当面は内緒にしておく方がよいように思われた。

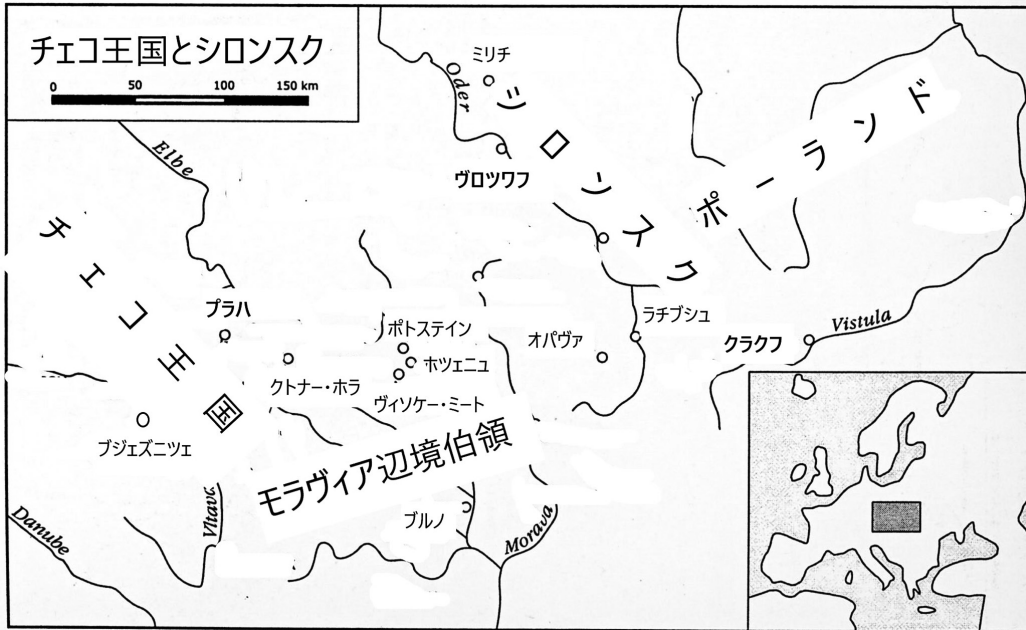
やはりその地で教皇の許に逗留していた折、かつてフェカンの修道院長であったピエール猓下<sup>32)</sup>が余を御自身の館に招いて下さった。猓下はリモージュ司教区の出身で、アラス司教、サンス大司教と昇進を重ね、ルーアン大司教に転任した後、余がアヴィニョンに滞在した当時は、殉教聖人ネレウス

とアキレウスに捧げられた名義聖堂<sup>33)</sup>を持つ司祭枢機卿になっていた。猓下のことはすでに触れた<sup>34)</sup>。フランス国王フィリップ<sup>35)</sup>の顧問団の一人で、前述したように、灰の水曜日に国王の御前でミサをあげたあの御方である。余自身も、教皇ベネディクトゥスの許にあった時、モラヴィア辺境伯となっていた。或る日、猓下の館で余と会っていた折に、猓下はこんなことを口にされた。「殿下はさらにローマ人の王になられましよう」と。余も答えたものだ。「猓下が教皇になれる方が先でございましょう」と。後述するように、このどちらも現実になるのであった。

この後、余はわが父とともにフランスへ戻った。そして、わが父はそこから余を、(ニーダー)バイエルン大公ハインリヒに先立たれていたわが姉の許に遣わした。皇帝として振る舞っていたルートヴィヒの圧迫を受けていた姉に支援と助言を与えるためである。しかるに、余が姉の許に辿り着いた時には、姉はすでにルートヴィヒと和解していた。余はそこを發ち、ザルツブルク大司教領を通過シタウエルン＝アルプスと呼ばれる山並みへと道をとった。

ゲルロスと呼ばれる溪谷を一日がかりで通り抜けた折のことだ。聖母の日、すなわち聖母マリア被昇天の日<sup>36)</sup>にパルマ司教区のテレンツォ村で余の身に起きた不可思議、すなわち、あの幻視の想い出が心に甦った。その時から、聖母を讃えて、余はあることを思い立った。栄光の聖母の時禱がプラハの教会で毎日歌われ、かくて聖母の生涯と事蹟と奇跡に関する新たな物語が日毎に読誦されるように定めることをだ。この計画が後に実現されたことは、後述されるとおりである<sup>37)</sup>。

それから、余はインスブルック溪谷のわが弟<sup>38)</sup>の許に辿り着いた。弟はティロール伯領の舵取りをトレント司教<sup>39)</sup>に委ね、チェコまで余に同行した。そこから弟はクラクフ国王<sup>40)</sup>を訪ね、次いでハンガリー国王カー



P.W. Knoll, F. Schaer, *Autobiography of Emperor Charles IV and his Legend of St. Wenceslas*, New York, 2001, P.259の地図をもとに作成



P.W. Knoll, F. Schaer, *ibid.*, P.258の地図をもとに作成

ロイの許に赴いた。このハンガリー国王とその嫡男でわが娘婿のラヨシュ<sup>41)</sup>と、ゆるぎなき同盟と協約で提携を図ったのである。

わが弟がハンガリーにあった折のことだ。急使が馳せ参じ、弟の妻<sup>42)</sup>がティロール伯領の貴族たちと結託し弟に対して陰謀を企んでいると告げた。このため、弟は急遽チェコとバイエルンを経てティロール伯領に引き返さざるをえなくなった。余も時を移さず、イン河谷をティロール伯領へと弟のあとを追った。余がひそかに探ってみたところ、わが弟の舅の庶子でアルベルトという者と、貴族の一人でわが弟の妻の侍従長であった者<sup>43)</sup>とが、その妻と伯領の他の貴族たちの同意を得て、こんな陰謀をめぐらしたということだ。すなわち、彼女がわが弟と離縁して、皇帝のごとく振る舞っていたバイエルン人の息子のルートヴィヒ<sup>44)</sup>を呼び寄せ、貴族がみな進んで主君に対するごとくこのルートヴィヒに恭順の意を示し、彼女自身はルートヴィヒと再婚するという陰謀だ。余は事の真偽を確かめたいと思い、プスコ兄弟の弟を伴ってアルベルトをひそかに待ち伏せして、彼を捕らえ森の中をインスブルック近傍のゾンネンブルクという城へと引立てた。城で拷問を加えられ、アルベルトは白状した。この企てはすべて、余の耳に入ったとおりであることだ。さらに、侍従長をも引捕らえようとしたが、折しも侍従長はわが追手から逃れてしまい、そこで余はその者の居城を跡形もなく破壊させた。その後、侍従長もまた、自身の朋輩によってわが手に引き渡された。命だけは助けてやったが、その他は、当然のことながら、余が存分に処分することになった。こうした顛末のすべてをわが弟に話して聞かせると、弟は余に感謝し、わが意見を容れて、余はティロールの城と弟の妻を監視下におくことにした。

その後、余は（ニーダー）バイエルンのわが姉の許に赴いた。姉が余の助力を求めたか

らだ。続いて、ザルツブルク大司教領を経て同じ道をティロールへと引き返し、ブリクセン司教領のタウフェルス城に入った。そして、そこからカドーレ溪谷をベッルーノ市に抜け、殉教聖人ヴァーツラフの日の前夜<sup>45)</sup>、夜陰に乗じて難攻不落を誇るメル城の城下に入り込み、攻囲の末に城を掌中に収めた。メル城はチェーネダ伯でカミーノの領主<sup>46)</sup>とヴェネツィア市の支配下にあり、当時、この両者と余は敵対していたのである。しかし、和睦後も、余は城の支配をそのまま続けた。

そこから余はトレント市に向かい、さらにティロール伯領に戻って聖カタリーナの日の前日<sup>47)</sup>まで余は留まった。そして、聖カタリーナの日の前夜、ガルダ湖畔のベネーデ城を包囲した。その城を占拠していたのは、ミラーノの支配者ルキーノ<sup>48)</sup>の軍勢とアルコの領主<sup>49)</sup>であった。トレント司教と共に極秘の裡に軍勢を集め、余は城から敵兵を蹴散らし、聖カタリーナの日のうちに城はわが手に落ち、それを余はトレント司教に委ねた。続いて、ヴィチェンツァ司教領のベルヴィチーノ城が余の軍門に降った。ヴィチェンツァ市とそのコンタード全域を領有していたのはマステイーノ・デッラ・スカーラ<sup>50)</sup>であった。だから、余は大軍を揃え夜陰に乗じてひそかにベルヴィチーノ城に近づき、軍兵で城の守りを固める必要があった。そこから余はトレントに引き揚げ、トレントからベッルーノ市に進んだ<sup>51)</sup>。

余がベッルーノ市にあった折のことだ。オーストリア公<sup>52)</sup>とゴリーツィア伯がフリウーリ地方のウーディネ市近傍に陣を構えてアクィレーイア総大司教<sup>53)</sup>を圧迫し、総大司教は自らの兵力だけではこれに対抗できず、余に書状を送ってよこした。その書面にはこうあった。「チェコ王家の血筋を引くモラヴィア辺境伯たる令名高きカール殿下と、殿下の兵士にお伝えします。女王の中の女

王、乙女の中の乙女に捧げられたアクイレイアの家が敵どもの激しい攻撃にさらされています。されば、女王の中の女王、乙女の中の乙女に奉仕する者ならばむしろ救援に馳せ参ずるべきではございませんか。ゆえに、殿下と殿下に従う貴顕の方々すべてにお願い申し上げます。女王の中の女王への敬愛の念あれば、その家と財物がかく劫掠されるのを黙過されませぬように」と。

こうした要請を聞くや、余はほぼ200あまりの甲冑兵と1000の歩兵の軍勢を率いて、普段は人の通らない高峰を縫って突き進んだ。主御自身もセツラヴァツレ踏破のためわれらに道を開いて下さり、大いに難儀しながらも、余はアクイレイア司教区に到達し、その翌日には総大司教と合流した。すでに総大司教は兵を集め、とある川の畔でわれらの近くに陣を構えて敵どもと対峙した。われらとの間にある川の対岸に敵陣があった。しかるに、敵どもは、その夜、余の到着を知るや、戦場に背を向け、四散してしまった。すかさず、余は敵どもを追撃し、とある城砦にその一部を包囲した。しばらくそこに留まって、余は幾度となく城砦に攻撃を仕掛けた。しかし、わが軍勢から多数の負傷者が出るばかりであった。

### 3. ヴィッテルスバッハ家の興隆

ヴィッテルスバッハという家名は、一族がバイエルンに所有した城の名に由来する。その居城に因んだヴィッテルスバッハ家の名が文献に初めて登場するのは1115年頃のことであるが<sup>54)</sup>、一族の系譜はさらに11世紀に遡る。史料の上で、確実にヴィッテルスバッハ家の祖とされるのは、1030年頃フライジング司教区の守護(フォークト)であったオットーという人物<sup>55)</sup>で、その子孫は12世紀初頭にバイエルン・プファルツ伯に任じられバイエルンの土豪として勢力を伸ばした。

ヴィッテルスバッハ家が帝国内の有力家門に躍進する道を開いたのは、同家初代のバイエルン大公オットー1世(1117頃～1183年)である。このオットーは、シュタウファー朝の皇帝フリードリヒ1世(バルバロッサ)の忠実な家臣として頭角をあらわし、皇帝のイタリア遠征に随行して武功をあげた。その忠節と武功を認めて、フリードリヒは1180年オットーにバイエルン大公領を授封する。1180年のこの授封こそ、ヴィッテルスバッハ家飛躍の第一歩となった。大公位はオットーの嗣子ルートヴィヒ1世(位1183～1231年)に継承され、それ以降、ヴィッテルスバッハ家とバイエルン大公領(のちに王国)とは19世紀に至るまで決して切り離せぬ不可分の結びつきを維持することになる。

1180年に次いでヴィッテルスバッハ家の運命を大きく変えたのが1214年である。この年に、ルートヴィヒ1世の嗣子オットー2世がライン・プファルツ伯領を授封されたのである。この授封は、帝国内におけるヴィッテルスバッハ家の地位を飛躍的に高めた。伯領がライン川中流の要衝に位置し、その所有者に経済的利益を約束したばかりではない。ライン・プファルツ伯の地位は、帝国の世俗諸侯たちの中で最も格式の高い顯職でもあった。帝国法上、国王不在の折には国王代理を務め、そして何よりも国王選出の際には選挙権を持っていた<sup>56)</sup>。こうして、ルートヴィヒ1世とオットー2世(位1231～1253年)の時代に、ヴィッテルスバッハ家は帝国内における有力家門に雄飛する礎が築かれた。また、二人の統治下に、ヴィッテルスバッハ家によるバイエルンの領邦支配体制も徐々に強固なものになっていく。

ところが、オットー2世の死とともに、ヴィッテルスバッハ家の順調な歩みは停滞を余儀なくされる。分割相続という宿痾が、ヴィッテルスバッハ家を襲ったのである。当時の帝国では、ヴィッテルスバッハ家に限ら

ず長子相続制が未だ確立されておらず、どの家門でも、父親の遺領は息子たちの中で分割相続されるのが通例であった。ヴィッテルスバッハ家がこの慣例を免れていたのは、ルートヴィヒ1世とオットー2世に相続を争う兄弟がいなかったからである。しかし、オットー2世の死は、ヴィッテルスバッハ家の内部に初めて分割相続とそれに伴う一族不和の火種をもたらした。

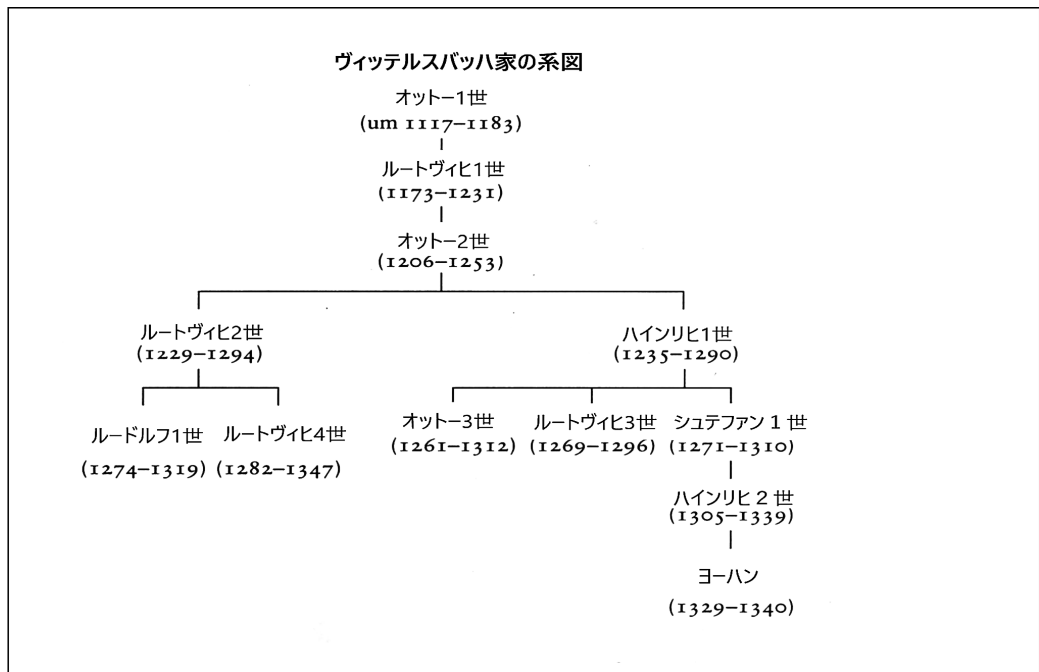
ヴィッテルスバッハ家最初の分割相続はオットーの二人の息子ルートヴィヒ2世とハインリヒ1世の間でなされた。父親の死の直後の一時的な共同統治を経て、1255年、兄のルートヴィヒ2世(位1255～1294年)はミュンヘンを拠点とするオーバーバイエルンとライン・プファルツ伯領を、弟のハインリヒ1世(位1255～1290年)はランツフトを拠点とするニーダーバイエルンをそれぞれ自らの領地とした。バイエルンのこの分裂は、およ

そ80年余り続くことになる。

1255年に始まるヴィッテルスバッハ家の分割相続は、その後250年余りの間に7回繰り返された<sup>57)</sup>。それは、時として、一族不和の原因となる。ヴィッテルスバッハ家の場合、その不和はとりわけ深刻であった。分割相続とそれに伴う確執は一族の結束を妨げたのみならず、ヴィッテルスバッハ家の更なる発展を阻害する宿痾となった。

#### 4. ルートヴィヒ4世

分割相続による弊害を除去しようとし、それにある程度成功を取めたのがルートヴィヒ2世の次子ルートヴィヒ4世(1282～1347年)であった。父大公の死後、1294年にオーバーバイエルン大公領とライン・プファルツ伯領をルートヴィヒ4世は兄ルードルフ1世(1274～1319年)と共同で相続した。しかし、



H-M. Körner, Die Wittelsbacher. Von Mittelalter bis zur Gegenwart, München, 2009, S.31. の系図をもとに作成。



父大公の遺産をめぐって兄弟間に争いが生じ、弟ルートヴィヒがむしろ主導権を握ってオーバーバイエルンを掌中に収めることに成功した。

このルートヴィヒが帝国全土にその名を轟かせることになったのは、同族が支配するニーダーバイエルン大公領の後見問題である。当時、ニーダーバイエルンでは初代大公ハインリヒ1世の3人の孫たちが相続人として遺されていたが、いずれも10歳に満たぬ幼児であった。そこで、これら遺児の後見は、1310年以来、同族のルートヴィヒに託されたのだが、ニーダーバイエルンがオーバーバイエルンの圧倒的な影響下に置かれることを恐れた勢力がオーストリアのハプスブルク家に接近し、遺児の後見をオーストリアのフリードリヒ美公（1289～1330年）に委ねた。ハプスブルク家の介入は、1313年のガメルスドルフの戦いで決着を見る。兵数において劣るルートヴィヒが、ハプスブルクの軍勢を撃破したのである。

ガメルスドルフの戦いは、ルートヴィヒの運命を変えた。この戦いでルートヴィヒの武名と声望は帝国全土に轟き渡り、ルートヴィヒは一躍時の人となった。折しも、カールの祖父でルクセンブルク家の皇帝ハインリヒ7世が1313年にイタリア遠征の途上で客死し、帝国の玉座は空位となった。トリーア大司教を中心とするルクセンブルク陣営はハインリヒの嗣子でカールの父ヨーハンを新しい国王に選出することを画策したが、国王の重責を担うにはヨーハンが若すぎたことから、帝国内最大勢力のハプスブルク家からの国王選出を阻止するため、諸侯の中から有能な対抗馬を求めた。こんな情勢下に彗星のごとく現れたのがルートヴィヒであった。

ハインリヒ7世の後継者を定める1314年の国王選挙は、二重選挙に終わった。ルクセンブルク陣営が擁立したルートヴィヒとハプスブルク家のフリードリヒ美公が並び立ち、両

者は土俵を替えて再び対決することになった。ちなみに、ルートヴィヒの兄で選挙権を持つライン・プファルツ伯ルードルフ1世は弟ではなくフリードリヒ美公に票を投じ、ヴィッテルスバッハ家内部における兄弟間の確執の深刻さを露呈した。二人の対立国王の対峙は8年あまり続き、1322年、ミュールドルフの決戦で終止符を打つ。ルクセンブルク家のヨーハンの援軍に助けられて、今回も、ルートヴィヒの勝利に終わった。1325年の和議で、フリードリヒ美公は王位請求権を最終的に放棄し、ハプスブルク家は帝国の政局における中心の座から去った。

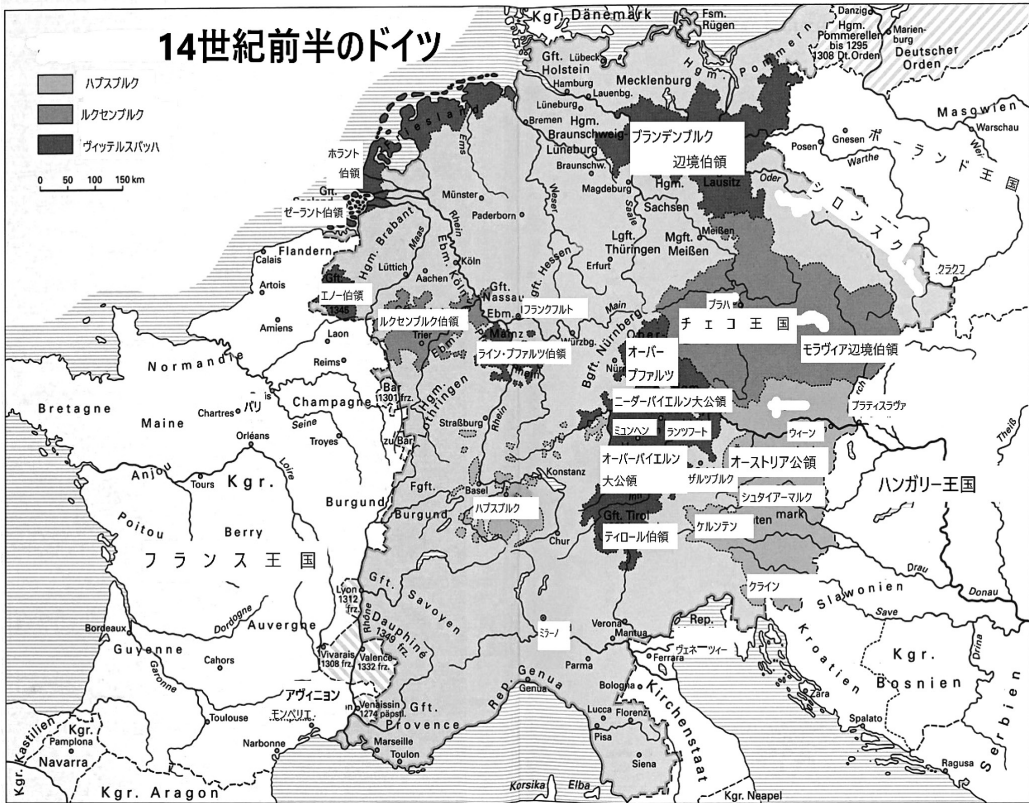
二重選挙とそれに続く帝国内の混乱は、アヴィニョンの教皇庁の介入を招く。教皇ヨハネス22世は帝国内の混迷を中世盛期の強大な教皇権再興の好機と見なし、1314年の二重選挙を無効と宣言して、1317年に異例の教書を発した。帝国は空位であり、空位期間中は教皇が国王代理として国王の世俗的支配権を行使するという独断的な教書である。教皇のこうした主張が実際に実行に移されたのは帝国領イタリアにおいてであり、ヨハネスは教皇軍を組織して帝国領イタリアの制圧に乗り出す。ミュールドルフの勝者がこれを黙認するはずもなく、1323年、ルートヴィヒはイタリア情勢への介入を決意する。その翌年、激怒したヨハネスはルートヴィヒを破門に処し、ルートヴィヒはヨハネスを異端と弾劾した。両者の対立は、ルートヴィヒのイタリア遠征（1327～1330年）で頂点に達する。この遠征で、ルートヴィヒはローマ市民の代表から皇帝に戴冠され（1328年）、ヨハネス22世の廃位を宣言し、一介の修道僧をニコラウス5世として対立教皇に擁立した。しかし、帝国領イタリアに確固たる支配を打ち立てるという当初の目的は果たせず、イタリア遠征そのものは失敗に終わった。ただし、国王の選出には教皇の認可を必要とするという教皇が長らく掲げてきた主張は、1338年、レンズの選帝

侯会議で否定され、教皇の認可がなくとも選帝侯の選挙のみで国王は決定するという原則が初めて確立し、ルートヴィヒは帝国内部の発展にその名を刻むことになった。

ルートヴィヒの取り組まなければならない課題が、ヴィッテルスバッハ家内部にもあった。分割相続とそれが引き起こす一族内部の確執の除去である。醜い骨肉の争いをルートヴィヒは知り尽くしていた。兄ルードルフのルートヴィヒに向ける敵愾心は尋常ではなく、1314年の選挙でこの兄はあえて弟の対立候補フリードリヒ美公に票を投じ、公然とルートヴィヒの敵陣営に与した。ルートヴィヒの反撃はすばやかだった。1315年、貴族たちを味方につけたルートヴィヒはルードルフをオーバーバイエルンから追放し、1317年には、若干の采邑地と引き換えにオーバーバイエルンとライン・プファルツに対する支配権の放棄をルードルフに強要した。この屈辱の2年後、弟への叛意を抱きながら、ルードルフは没する<sup>58)</sup>。だが、その死をもって、問題が解決したわけではない。ルードルフの遺恨は、息子たちに受け継がれた。ルートヴィヒは憎しみの連鎖を断つ必要があった。このために、ルートヴィヒとルードルフの後嗣たちとの間に締結されたのが、パヴィーアの家族協約(1329年)である。この協約で、ルートヴィヒは大胆な譲歩をした。オーバーバイエルンを自分の嗣子たちに確保する代わりに、ライン・プファルツとオーバーバイエルンの北部をオーバープファルツとしてルードルフの後嗣たちに割譲したのである。国王の選挙権に関しては、選挙が行われるたびに、オーバーバイエルン大公とライン・プファルツ伯が交互に選挙権を行使することになった。ここに、ルートヴィヒとルードルフと間に長らく続いた兄弟抗争は最終的な決着を見た。協約締結後、ルードルフの後嗣たちはルートヴィヒへの忠誠を貫くことになる<sup>59)</sup>。

ヴィッテルスバッハ家内部の問題で、最

後に残されたのはニーダーバイエルン問題であった。初代ニーダーバイエルン大公ハインリヒ1世の孫たちの後見権を、1313年のガメルスドルフの勝利でルートヴィヒが確実なものにしたことはすでに述べた。ところで、後見人の影響力は被後見人の成長とともに薄れ、時として被後見人の自立への渴望が後見人への対抗心に変じることがある。ニーダーバイエルン大公ハインリヒ2世(1304~1339年)の場合がそうであった。ハインリヒに自立への機会を与えたのは、チェコ国王ヨーハンの長女マルガレータとの結婚(1328年)であったと思われる。この結婚は本来ルートヴィヒとヨーハンの盟友関係を強化するために企てられたものだが、同時にそれはルートヴィヒに匹敵する力を持つ強力な後ろ楯をハインリヒに提供することになった。この後ろ楯を得て、ハインリヒはルートヴィヒの庇護を離れ、ヨーハンへの接近を図っていき、それはやがて深刻な事態に発展する。ヴィッテルスバッハ家とルクセンブルク家が家門勢力の拡大政策で競合し両家の亀裂が深まると、ハインリヒは同族のルートヴィヒではなく、義父のヨーハンの陣営に加担したのである。1310年にニーダーバイエルン大公領をハインリヒ1世の3人の孫が共同で相続したが、1333年と1334年にハインリヒ2世の共同相続者が相次いで死去し、このハインリヒが大公領の単独支配者となった。かつて一つであったバイエルンは、かくして、敵対し合う二つの勢力に分裂してしまった。しかし、幸運がルートヴィヒに味方した。ハインリヒ2世が幼い嗣子ヨーハンを遺し、若くして死去したのである(1339年)。ルートヴィヒが再びヨーハンの後見人となったが、この嗣子も父大公の死の翌年に夭折してしまう(1340年)。こうしてニーダーバイエルン大公領の家系は絶え、ルートヴィヒは勞せずして大公領の接収に成功した。ここにバイエルンの再統合が成った。1255年の分裂から85年後のことである。



M. Menzel, Die Zeit der Entwürfe 1273-1347, in: Gebhard Handbuch der deutschen Geschichte, Bd7a, Berlin, 2012. の表紙裏の地図をもとに作成

ヴィッテルスバッハ家内部の融和と並んで、ルートヴィヒが精力的に推し進めたのは自家の家領拡大政策である。この政策が王権の基盤強化を目的としたことは言うまでもないが、それはまた分割相続により嗣子たちの間でバイエルンの領土そのものが再び分割されるのを回避するためでもあった<sup>60)</sup>。家門勢力拡大政策においてルートヴィヒがなした最大の成果は、ブランデンブルク辺境伯領の獲得である。この辺境伯領を創設以来治めてきたのはアスカニア家であったが、1319年、同家の継承者が絶えた。ルートヴィヒはミュールドルフの勝利の翌年、単独の国王となって行く手を阻む敵対者がいなくなったとき、空位となっていたブランデンブルク辺境

伯領を自分の嗣子ルートヴィヒ5世(1315～1361年)に授封した。この領邦は富裕ではなかったが、辺境伯は国王選挙権をもつ選帝侯の一人であった。ルートヴィヒ4世が手にした実り豊かな果実は、ネーデルラントにもあった。ホラント、エノー、ゼーラントの諸伯領を併せ持つヴィレム3世(1308頃～1345年)が男児の嗣子なくして死去すると、1346年、その娘と再婚していたルートヴィヒがそれら諸伯領を掌中に収めたのである。こうしてルートヴィヒは本領地のバイエルンを分割することなく、嗣子ルートヴィヒ5世以外の息子たちにも相続地を遺すことに成功したのである。

しかし、ルートヴィヒは、ティロール伯領

の相続問題で躓いた。ティロール伯領は1335年以來チェコ国王ヨーハンの次子ヨーハン・ハンリヒが相続していた土地であり、そこに強引ともいえる手法で家領拡大の触手をのびしたのである（1341年）。ハプスブルク家打倒で当初は結束していたルートヴィヒとヨーハンはすでに家門勢力拡大政策の衝突により帝国各地で亀裂を深めていたが、ティロール伯領をめぐる問題でルクセンブルク陣営の怒りは沸点に達した。この怒りこそ、ルクセンブルク陣営がモラヴィア辺境伯カールをルートヴィヒの対立国王へと押し上げていく原動力となる。

#### 註

※ 翻訳に際して底本としたのは、従来どおり、E. Hillenbrand, *Vita Caroli quarti—Die Autobiographie Karls IV.*, Stuttgart, 1979. である。なお、今回も、チェコ語訳の、J. Pavel, *Karel IV. Vlastní Životopis*, Praha, 1978.、英語訳の、P.W. Knoll, F. Schaer, *Autobiography of Emperor Charles IV and his Legend of St. Wenceslas*, New York, 2001.、フランス語訳の、P. Monnet, J.-C. Schmitt, *Vie de Charles IV de Luxembourg*, Paris, 2010.、を参考にした。

- 1) 1338年。
- 2) チェコ王国内の貴族。チェコ民族伝来のプシェミスル王家が統治の要としたのは王国各地に築かれた城砦であり、王権に直属する勤務貴族がそれら城砦に配されて、管轄地域を統括した。ところが、12世紀後半以降、勤務貴族に代わって、王権に帰属しない所領を集積し、それを世襲する新しい貴族階層が抬頭する。これら世襲貴族階層はしばしば王権直属の城砦を横奪し、王権の権力基盤を次第に切り崩していった。1306年のプシェミスル王家の断絶はこの傾向に拍車をかけ、1310年にチェコ王国を掌中に収めたルクセンブルク家は、有力貴族階層の勢力拡大と王権の弱体化

という問題に直面する。チェコ不在中の父王ヨーハンの名代としてカールは1333年に王国統治を託され、自叙伝第8章に記されるとおり、王権再建の方策として着手したのが、王家の支配から離れていた城砦と資産の恢復であった。こうしたカールの政策は貴族たちの抵抗にあい、ポトステインの領主とカールの争いは、城砦の接収を図るカールに対するポトステインの領主の反抗に起因する。

- 3) この個所に関するカールの記述には、曖昧で不明な点が多い。フランクフルトでカールが皇帝ルートヴィヒ4世と相まみえたという当時の証言があるが、その会見の内容は定かでない。後述される両者の約束と関連するのかもしれない。
- 4) カールが1333年にイタリアのテレンツォ村で体験した幻視（自叙伝第7章）を記念して設立された。ただし参事会の実際の活動が確認されるのは、1342/43年のことである。
- 5) ローベルト・カーロイ1世（在位1308～1342年）。
- 6) ルートヴィヒとヨーハンの協議は、1339年3月20日にフランクフルトで行なわれた。
- 7) フランクフルトの和睦で、ヨーハンはルートヴィヒを皇帝と認め、皇帝への臣従と、あらゆる勢力（ローマ教皇を含む）に対する皇帝への支援を約束した。一方、ルートヴィヒは、ヨーハンに対して、その領有するチェコ王国、モラヴィア辺境伯領、ルクセンブルク伯領、シロンスク（シュレージエン）の諸侯領を安堵した。

自叙伝第4章に記されるとおり、ルートヴィヒはアヴィニオンにあった教皇庁と敵対し、1328年ローマで、教皇の同意なく非合法にローマ皇帝の帝冠を戴いた。そのため、父王ヨーハンとは違い、フランクフルトの和睦以後も、カールはルートヴィヒを正統な皇帝と認めず、自叙伝では一貫して、ルートヴィヒを<皇帝として振る舞っていた> (*se gerebat pro imperatore*) と形容し、<皇帝ルー

- トヴィヒ>ではなく<バイエルンのルートヴィヒ>と表記している。
- 8) 1339年6月。
- 9) ローベルト・カーロイ1世。
- 10) アルブレヒト2世(位1330~1358年)。
- 11) シロンスクのオパヴァ侯ニコラス2世(1318~1365年)。妻の出身侯家の断絶により、1335年、ラチブシュ侯領を取得した。この取得が、チェコ国王ヨーハンとの争いの原因である。1339年7月、カールの立ち合いの許で、ニコラスは、ヨーハンから、男系相続人がいない場合、女子にも相続可能なチェコ王冠に帰属する封土として、ラチブシュを授封された。
- 12) 1339年7月。
- 13) オクサのナンケルス。1326年にヴロツワフの司教に任じられ、1341年、在任中に死去。教皇献金の支払い方法をめぐって、シロンスクの諸侯が教皇庁と対立し、ポーランド王国のクラクフ司教であったナンケルスが教皇庁によりヴロツワフの司教へと転任させられた。シロンスクの諸侯はポーランド国王ではなくチェコ国王に臣従していたので、ヨーハンとカールはシロンスクの諸侯を支援し、教皇庁の代理であるヴロツワフの司教と対立した。自叙伝で後述されるように、シロンスクの教皇献金問題が解決するのは、ナンケルス死後の1342年のことである。
- 14) フィリップ6世(位1328~1350年)。
- 15) 1332年のフォンテーヌブロー協定で、フランス王権がルクセンブルク家を支援する代わりに、ルクセンブルク家はフランス王権に奉仕してそのあらゆる敵と戦うことを義務づけられた。ヨーハンによる軍事的支援のためのフランス出兵は、この協定に基づく。
- 16) エドワード3世(位1327~1377年)。
- 17) いわゆる英仏百年戦争。
- 18) チェコ王国を代表する大貴族で、カールの父王ヨーハンと敵対したこともある。
- 19) ニーダーバイエルン大公ハインリヒ2世(1304~1339年)。バイエルン大公領は、1255年に、オーバーバイエルンとニーダーバイエルンに分割され、皇帝ルートヴィヒ4世はオーバーバイエルン大公。
- 20) チェコ国王ヨーハンの長女(1313~1341年)。
- 21) ヨーハン(1329~1340年)。このヨーハンの死によって、ニーダーバイエルンとオーバーバイエルンは統合された。
- 22) ライン・プファルツ伯ルードルフ2世(位1329~1353年)。カールはルードルフをバイエルン大公としているが、これは誤りである。
- 23) アンナ(1329~1353年)。カールの最初の妻ブランシュの死後、1349年、このアンナとカールは再婚することになる。
- 24) アンナ(1326~1351年)。
- 25) E. Hillenbrandの校訂本では *civitatem Ronnacensem* とあり、これを Hillenbrand はルネ市と解釈したが、ここでは英語訳をつけた P.W. Knoll, F. Schaer とフランス語訳をつけた P. Monnet, J.-C. Schmitt に従い、カンブレ市とした。
- 26) 1339年10月23/24日。
- 27) カステイーリャ・イ・レオン国王アルフォンソ11世(1311~1350年)。アルフォンソは、1340年10月、リーオ・サラードで、グラナダ軍を撃破する。カールのヒスパニア出征は、この戦いに参加するためであったと推測される。
- 28) カールの誤記。アルフォンソと戦ったグラナダ国王は、ナスル王朝のユースフ1世(1333~1354年)。このユースフの兄弟が Faraj で、カールの誤記はこの兄弟の名に由来するものと考えられる。
- 29) 本名ジャック・フルニエール(1285頃~1342年)。第3代アヴィニオン教皇(位1334~1342年)。
- 30) 註13)を参照。
- 31) 自叙伝第7章に記されたテレンツォ村での体験を参照。
- 32) ピエール・ロジュール(1291~1352年)。カールがフランス国王の宮廷で幼少時代を過ごし

- た折に、格別な薫陶を受けた人物。1342年にクレメンス6世として、第4代アヴィニヨン教皇となる。
- 33) ローマにある。
- 34) 自叙伝第3章。
- 35) ヴァロワ王朝初代の国王（位1328～1350年）。
- 36) 8月15日。
- 37) カールがブラハの聖ヴィート教会でこの計画を実現したのは1343年のこと。自叙伝でこれが記されることはない。
- 38) ティロール伯ヨーハン・ハインリヒ（1322～1358年）。
- 39) プルノのミクラシュ。チェコ出身で、カールの側近。
- 40) ピアスト王朝最後のポーランド国王カジミェシュ3世（位1333～1370年）。
- 41) のちのハンガリー国王ラヨシュ1世（位1342～1382年）。1338年、カールの長女マルガレータと結婚した。
- 42) マルガレータ・マウルタシュ（1318～1369年）。ケルンテン公にしてティロール伯ハインリヒ6世の相続娘。
- 43) ハインリヒ・フォン・ロッテンブルク。
- 44) ルートヴィヒ5世（1312頃～1361年）。皇帝ルートヴィヒ4世の嫡男で、1323年以来、ブランデンブルク辺境伯となっていた。
- 45) 1340年9月27日。
- 46) リツアルド・ダ・カミーノ。イタリア北部で結成されたチェコ国王ヨーハンに対する同盟の指導者。
- 47) 1340年11月24日。
- 48) ルキーノ・ヴィスコンティ（1287～1349年）。ミラーノ市のシニョーレ。
- 49) ルキーノの庶子。
- 50) マスティーノ2世（1308～1351年）。マントヴァ市のシニョーレで、14世紀前半、ロンバルディア地方一帯に勢威をふるった。
- 51) 1340年12月。
- 52) ハプスブルク家の当主アルブレヒト2世（位1330年—1358年）。
- 53) ベルトラン・ド・サン・ジュニエ。1334年以来、アクィレーイアの総大司教。
- 54) L.Holzfurtner, *Die Wittelsbacher. Staat und Dynastie in Acht Jahrhunderten*, Stuttgart, 2005, S.15.
- 55) *ibid.*, S.16.
- 56) H-M.Körner, *Die Wittelsbacher. Von Mittelalter bis zur Gegenwart*, München, 2009, S.28.
- 57) *ibid.*, S.30.
- 58) L.Holzfurtner, *op.cit.*, S.71.
- 59) *ibid.*, S.72.
- 60) *ibid.*, S.76.